

19世紀後半の感性の表現として、マネ、モネ、セザンヌ

それらは近代の身体を取り巻く「権力」、そしてそれになんとか応答しようとする身体を示していないだろうか。

(1) エドゥアール・マネ (Manet) (1832-83)

印象派の先駆者、近代絵画の祖とされる。

作品：温室にて、鉄道、給仕する女、笛を吹く少年、フォリー・ベルジェールのバー

- ・ <鉄道><給仕する女>：「見えないものを見ている」身体、キャンパスの裏側を見せるような絵画（「不可視性の戯れ」
 - ・ 麻酔をかけられたような身体（<温室にて>）
 - ・ 空虚の上に足を乗せている身体のリズム（笛を吹く少年）
 - ・ スペクタクルに魅せられたかのような身体（<バルコニー>）。光はほとんど絵の外にあって、部屋の中はほとんど見えない。内と外、光と闇、生と死の間で宙吊りになっている身体。
 - ・ 散漫になりそうになる注意を必死に（ちくはぐに）つなぎとめること。
- マグリットに影響。
- ・ <フォリー・ベルジェールのバー>：空間の歪み。

まとめ：

「スペクタクル」の時代における注意の拡散とそれを繋ぎとめようとする身体

ヒステリー的な身体

cf. シャルコ (Charcot) (1825-93)

シャルコー (1825-93)。フランスの神経学者、精神分析医。1882年「サルペトリエール病院」教授。催眠法を利用した、ヒステリー研究で知られる。催眠術で症状を再現した公開講義の記録がのこっている。フロイトの精神分析に影響を与える。

ヒステリー：カタレプシー、嗜眠、夢中遊行

マネの同時代における「精神医学」→「精神分析」（こころを読むこと）

- ・ ヒステリー（シャルコー）、（女性の）身体の「コントロール」
- ・ 「写真」の使用→ヒステリー的な身体の可視化

「病院」という場所についての関心。病気というものをありのままに見させ、病気の真理を作り出す場→これはどのように成立したのか。

参考：今は19世紀のヒステリー症状はほとんど見られないと言われるが、現代の身体とこころをめぐるさまざまな病につながっているかもしれない。

2) モネ (Monet) 1840-1926

形を「光の移ろい」に解体

3) セザンヌ (1839-1906)

「モネは眼にすぎない。だが偉大な目だ」

「わたしは印象派の作品に、ルーブル美術館のような堅固さを与えたい」→印象派の感性・感覚から出発した上で、そこから世界を構築しなおすこと。

==

参考文献

ミシェル・フーコー『マネの絵画』（筑摩書房）

メルロ＝ポンティ「セザンヌの懐疑」（『メルロ＝ポンティ・コレクション』ちくま学芸文庫所収）

ジョナサン・クレーリー『知覚の宙吊り』（人文書院）

ガスケ『セザンヌ』（岩波文庫）